

あとがき

中国の文学革命は、生贄を必要とした。

生贄だから、同時代に活動している生身の人間ではなくてはならない。しかも、著名人であることが求められた。有名であればあるほど生贄としての意味も価値も強まる。

1918年、それに指名されたのが林紓である。当時、外国小説の翻訳でこれほど広く名前が知られている人物もめずらしい。以来、林紓は、文学革命の反対者代表としての役割をつとめるよう強制された。死後もかわりはない。現在にいたるまで、文学革命に反対した守旧派の代表者として罵られ続けている。林紓本人の意思とは無関係に、文学革命派によってそう位置づけられたのである。林紓は、文学革命の犠牲者なのだ。痛ましい、ということばさえ凍りつく。

最初におことわりしておく。本書は「林紓研究」と称してはいるが、林紓の全体を対象にはしていない。前著『林紓冤罪事件簿』につづく第2論文集となる。林紓冤罪事件に焦点をあわせ、引き続いて追究する。すなわち、林紓の翻訳についての論考いくつか、および文学史における林紓の位置を論じた文章などを集めた。「陳独秀の北京大学罷免」は、題名だけでは林紓とは無関係に見えるかもしれない。だが、林紓に濡れ衣をきせた人々のうちのひとりが陳独秀だ。林紓の文章を読み解く上で欠かせないと考える。本書に収録した理由である。

林紓冤罪事件は、大きくいってふたつの要素によって構成される。ひとつは林紓そのものであり、もうひとつは五四事件直前に見られる林紓の行動である。

林紓はシェイクスピアとイプセンの戯曲を小説に変えて翻訳した、といって罵

倒されつづけてきた。しかし、これが無実の罪であることは私の前著で明らかにしている。

非難のもうひとつは、ユゴー「九十三年」などの原作を大幅に削除して漢訳したことだ。翻訳の底本について推測しておいた。簡約版を使えば、大幅に削除したように見える。結局のところ、これについての林紓批判も事実無根であった。本書に収録した論文をご覧いただきたい。

1919年の五四事件直前において、林紓は文学革命に反対したという。林紓批判が継続されているもうひとつの大きな理由である。しかし、事実は異なる。林紓が行なったことを針小棒大にいて彼を反対者代表に仕立て上げたのは、文学革命派の方だ。これも前著に書いた。また、本書でも文学史における林紓の位置を検討してそれを確認した。

林紓に関する批判の根拠が基本的に存在しない。私は、この事実を明確にした。

私は、つぎのことを主張する。現在学界で定着している林紓批判は間違っている。林紓とその翻訳を正当な位置にもどして再評価する必要がある。

林紓に関する個々の事実を検証せず、翻訳の底本を探索することもなく、研究者の多くは林紓を罵る列に加わった。私は、研究者たちを批判しない。その事実がある、とだけいっているだけだ。だが、本書を読んだ人は、批判の言辞が多いと感じられるかもしれない。林紓に濡れ衣をきせた人々に対して相応のことばが自然にでてきた、とご理解いただきたい。

林紓に関するこの2冊を書いた後、私の心中にスッキリしないものが残る。

論文の根拠について不安を感じるわけではない。林紓冤罪事件は、基本的に解明したと私は判断している。それとは違う種類のものだ。

神経を逆なでされるような、ざらついた感覚だ。私の感情の奥底に新しく生じて沈潜している。それについて説明するのは少しむづかしい。

従来の林紓評価を逆転させることになったのは、そうしようと考えてのものではない。最初から意図したことではなかった。

できるだけ資料を集めて事前に準備をした。いつもとかわらない。資料といっても、一般に公表されたものであることは断わるまでもなからう。中国の、特に五四時期に関係する事柄だから、誰も知らない秘密の文献が日本にあるわけでは

ないのだ。手元にたぐり寄せた文献を普通に読み、必要に応じて調査範囲を広げ、さらに資料を集め曲折をへて、熟慮したあげく自然に到達した結論である。私としては、論証は可能なかぎり行なったと考えている。だから、そこに不安はない。その結論が学界で受け入れられないだろう、と悲観しているのでもない。ましてや焦燥感など私が持つわけもない。いつもひとりでやってきた。他人の評価は、私とはなんの関係もないからだ。

私のいただいた神経のざらつき感である。

その発生源をたどると、大学で中国語を学びはじめて以来の学習体験に関係するようだ。私と中国の出会いがそこにはじまるから当然か。

大学で聞いた講義のひとつに、五四時期文学から説明がはじまる中国現代文学史があった。そこが出発点である。自分でも文学史をいくつか読んだ。それまで、個人としては中国とは接点がない。何も知らない学生だから、勉強が必要だった。卒業論文では清末小説を対象にしたが、いずれはそれにつづく五四時期の文学に、という考えが無意識にせよあったのかどうかすらも定かではない。

清末小説は古典文学史の尻尾だったり、あるいは現代文学史の頭になったり、研究者の考えによって扱いが異なる。その清末小説を当面の研究課題としたから、中国現代文学史も集めていた。ただし、当時は、現代文学史関係の書籍といっても香港からの影印本しか入手できなくなっている。大学入学と同時に中国では「文化大革命」がはじまった。いくつかの例外はあったにしても、毛沢東関係の書籍を除いて出版界も基本的には活動を停止したからだ。

1977年のことだ。「老残遊記」評価に関連して胡適を取り上げた。「文革」が終了したのは1976年である。中国の学界では、1950年代からの胡適批判が依然としてつづいていた。しかも、「老残遊記」は「文革」以前から否定的評価が下されている。いわば否定の自乗なのだ。当時、胡適の「老残遊記」研究について論文を書く研究者はいなかった。胡適を調べるとすれば、五四時期の代表的雑誌として有名な『新青年』を見なければならぬ。このたび林紓について追究する必要から『新青年』影印本をふたたび手にした。本当にひさしぶりだ。

五四時期における林紓の位置を確認するために、書架に置いていたいくつかの文学史が役立つ。40年が経過しているとは、われながら少し驚いた。だが、清末

小説研究の延長線上にある。それくらいの時間がかかるのも不思議ではない。

文学史のいくつかはなつかしく読み直したことだ。ある書籍には鉛筆による書き込みがある。見れば、それが自分の筆跡であることに感慨をもよおす。昔の痕跡が残っているからそうだったとわかるだけで、今の私にはおぼろげな記憶しかない。所蔵のものだけでは間に合わない。数種類の文学史を補充した。

本書に収録した論文をごらんいただければおわかりだろう。中国現代文学史は、五四時期の林紓を基本において全面否定している。

私のいなく違和感は、どうやらその過去の学習体験に原因があるらしい。

勉強だと思って力をいれて読んでいた中国現代文学史は、今から見れば明らかに偏向している。林紓には負の位置しかあたえようとしない。その箇所は事実とは異なるから、私はそれを偏向という。ここには、研究者の強い意志がある。あるいは、公平に記述しているつもりだから、偏っていることに研究者自身が気づいていない。意識的にせよ無意識的にせよ、傾いていることにはかわりはないのだ。

なにを今更、とおっしゃる人もいるかと推測する。偏向した文学史が書かれるのはその理由があるからだ。先刻お見通しである。そういう研究者もいるだろう。

ただ、私にしてみれば意外の感をぬぐいきれない。林紓評価を検証した結果、たまたま偶然ではあるが現代文学史の偏りに気づいた。日本で刊行された中国文学史も例外なく林紓を批判する。最近というわけではなく、過去をはるかにさかのぼる。根が相当に深い。研究者独自の視点というものがないのである。それをいうなら、日本以外でも同様なのだが、例外がほとんどないという事実が、私を打ちのめす。

現代文学史の見なおし、書きかえの必要性が、中国で過去に唱えられていることを知らないわけではない。だが、それらは私にしてみれば人ごとであった。清末小説研究には、直接関係しないからだ。清末小説研究についていえば、着手されていない領域のほうが多い。見なおす本体が存在しないに等しいといえればいいすぎか。だが、そうだからこそ清末を対象とした文学史がいくつか新しく刊行されている。

林紓についてはどうか。最近の文学史を調べたが、書き直された形跡は一切ない。そうであれば、林紓に関する文学史の見なおしは実行されなかった。あるいは

は、検討はされたが修正の必要は認められなかったということではないか。個々の論文では従来とは違った指摘、すなわち林紘再評価の必要性を唱えるものがボツボツ書かれてはいる。とはいえ、文学史に焦点をしばれば、林紘批判がやはり揺るがぬ基調となっている。

ならば、私にとっては従来からの親しい文学史が継続刊行されていることにほかならない。そういう思いが強い。学生時代からはじまって現在にいたるも説明内容に変更がない。その期間が長かっただけに揺り戻しが大きいということだ。だからこそ「裏切られた」という感情が出てきたらしい。これが私のなかに発生した神経をざらつかせる感覚の実体だといってもいい。

「あなたもそうだったのか」。あれほど信じていたのに（自分がシーザーだと思っているわけではありません。考えたこともありません。林訳「ジュリアス・シーザー」を検討したところからくる連想にすぎない。単に、一般論として、常識的にのべているだけです。まさかとは思いますが、わざと裏読みする人がいないとも限らないから、つけ加えておきます）。

五四当時から日本人研究者が、その状況について報告し評論を発表している。林紘に関しては、同時代者によって否定する言辞が発せられ、のちにそれが定着して変更がなされていない。その意味では学界が一体となって筋金入りである。

「「文学革命」以後、人々はみな林氏を罵る権利をもつことになった」（1924）。こう書いたのは周作人である。そのことば通りになった。中国のみならず世界中の研究者が林紘を罵る権利を共有し享受している。だからこそ、80年以上も林紘批判が継続された。それがおかしいと気づいているのは、ごく少数の人だけだ。

中国の研究を二番煎じ的に後追いつめる意味はあるのか、と発言する考えは私にはまったく、ない。ただ、日本で行なわれてきた中国近現代文学研究について、なんだがガッカリした、というのが正直なところだ。あくまでも林紘に関連して、という点をお忘れなく。林紘に言及のない文献は対象にしていないし、その他の作家は範囲外だ。ましてや、全体について言っているわけではない。しつこいようだが、林紘に関係する部分のみを話題にしている。取り違えのないようお願いしたい。

清末小説研究の分野では、そのような感覚を持つという体験をしていない。も

とから冷え切った研究分野だ。つまり、人の興味を引かないということ。中国において言及されない時代だったから、日本でも触れられることがない。先行論文はほとんど存在していないといってよい。私はそういう状況の中で研究を進めてきた。だから、比較のしようもなかった。

だが、研究者が多くいる五四時期の文学研究には、林紓についての発言が比較的豊富だということができる。その分、結果として私が感じる力抜けの度合い、程度が深かったというだけのことだ。個人的な感想だとして読み流してほしい。

最後にひとこと。論文の中で多くの文献を引用した。それらを執筆した研究者を私は批判しているのではない。そういう事実があると指摘しているだけだ。このことは前著でもしつこく表明している。ご了解いただきたい。

2008.11.1

樽本照雄

初出一覧

以下の3本は、すべて『清末小説』第31号(2008.12.1)に掲載した。それ以外は未発表。

「阿英による林紓冤罪事件 『吟辺燕語』序をめぐって」

「周作人が魯迅を回想して林紓に言及する 日本語訳注釈について」(沢本香子名を使用)

「『林紓冤罪事件簿』ができるまで あるいは発想と研究方法について」